

目次

凡例	11
はじめに	13
I 若きいろこのみの蹉跎	19
第一章 そのその夕顔——「夕顔」巻における「心あてに」歌の解釈をめぐって——	21
一 「心あてに」歌をめぐる諸問題	21
二 「心あてに」歌の現在	28
三 名告りせぬ夕顔	32
四 そのその夕顔	35
五 「夕顔の花」から「花の夕顔」へ	43
六 夕顔的なるものの顕現	47

第二章	門前の隨身——夕顔物語の始発をめぐって——	65
一	「夕顔のしるべせし隨身」の諸問題	65
二	『源氏物語』のなかの「隨身」	69
三	「はらふ」隨身	73
四	門に入って花を手折るということ	78

第三章	覆面の光源氏——夕顔物語における伝承世界をめぐって——	87
一	夕顔物語と三輪山式神婚譚	87
二	覆面の光源氏	91
三	光源氏の顔に寄り来るもの	96
四	光源氏が覆面をとる時	99

第四章	夕顔物語と「昔物語」	109
一	「昔ありけん物の変化」めく光源氏	109
二	夕顔物語と三輪山説話	111
三	顔を隠して女性のもとに通う話	114

四	通ってくるものに女性が食われる話	117
五	物語を生成させる物語	120

Ⅱ	仮構される聖代	127
---	---------	-----

第五章	池のほとりの光源氏——「少女」巻の放島の試みを起点として——	129
一	放島の試み	130
二	池のあそび	134
三	宴の記憶	137
四	王者の池、蓮の池	141

第六章	野に行く冷泉帝——「行幸」巻の大原野行幸をめぐって——	151
一	大原野行幸の位相	151
二	野行幸以前	154
三	〈水の女〉の視線	158

四	聖代の実相	162
---	-------	-----

第七章	儀礼の梅枝——「梅枝」巻における朝顔姫君をめぐって——	171
-----	-----------------------------	-----

一	「梅枝」巻の朝顔姫君	171
二	朝顔姫君の噂	174
三	梅枝をめぐる儀礼	177
四	仮構される〈いろいろのみ〉	181

第八章	御湯殿の儀の明石君——「若菜上」巻における明石の町の生誕儀礼をめぐって——	189
-----	---------------------------------------	-----

一	「若菜上」巻における御湯殿の儀	189
二	迎湯の位相	193
三	御湯殿の儀に参り来るもの	197
四	御湯殿の儀の始原	201
五	外祖母としての明石君	206

III	苦悩する巨人	215
-----	--------	-----

第九章	光源氏の退屈——高崎正秀の源氏物語論をたどりつつ——	217
-----	----------------------------	-----

一	「つれづれ」なる光源氏	217
二	高崎正秀の方法とその位相	220
三	文学をおもしろくなくする方法	223
四	〈神の子〉の理想の生活と女三宮	227

第十章	女三宮のなつかぬ唐猫——柏木物語におけるその位相をめぐって——	237
-----	---------------------------------	-----

一	唐猫の登場	237
二	なつかぬ唐猫	240
三	献じられる唐猫	243
四	唐猫のゆくえ	248

第十一章	光源氏の〈みさを〉——「若菜下」巻における「うたての翁」をめぐって——	257
------	-------------------------------------	-----

一	うたての翁、光源氏	257
二	『源氏物語』の「翁」	261

三	翁の恋	269
四	光源氏の〈みさを〉	276

第十二章 〈みさを〉について——光源氏論のために——

一	光源氏の〈みさを〉	289
二	「みさを」の語義	291
三	「みさを」の位相	295
四	折口名彙としての〈みさを〉	298

IV 情念のゆくえ

303

第十三章 〈もののけ〉の幻影——柏木の絶筆をめぐって——

305

一	死の視線	306
二	もうひとつの絶筆	310
三	「鳥の跡のやう」な筆跡	314
四	〈もののけ〉の柏木	319

第十四章 柏木の文袋——封じ込められた最後の手紙をめぐって——

325

一	恐ろしき袋	325
二	手紙を書く柏木	329
三	供養される手紙	334
四	袋のなかの柏木	337

第十五章 「あはれ、衛門督」考——『源氏物語』における右衛門督をめぐって——

347

一	「あはれ、衛門督」をめぐって	347
二	右衛門督の位相	352
三	『源氏物語』における右衛門督	359
四	右衛門督としての柏木	362
五	子孫の途絶と怨霊	366
六	祀りあげられていく柏木	371

第十六章 「紙屋の人」を召す光源氏——「鈴虫」巻における柏木の位相——

379

一 「紙屋の人」を召す光源氏	379
二 紙屋紙の位相	382
三 紙屋紙と宿紙	386
四 柏木の手紙のゆくえ	389

第十七章 扇をさし隠す夕霧——「夕霧」巻における夕霧の小野再訪をめぐって	397
一 「夕霧」巻における夕霧の小野再訪	397
二 「扇をさし隠す」の解釈をめぐって	399
三 「扇をさし隠す」というふるまい	401
四 「扇をさし隠す」女性たち	404
五 まめ人の顔	407

V 終わりゆく世界	413
-----------	-----

第十八章 朧月夜の退場——「若菜下」巻における「作物所」をめぐって	415
一 朧月夜の出家	415

二 作物所の諸相	417
三 六条院における作物所設置の可能性	420
四 作物所の人を召す光源氏	423

第十九章 紫上の二条院——「若菜下」巻における転居を起点として	431
一 六条院から二条院への転居	431
二 紫上と二条院	434
三 二条院の伝領をめぐって	438
四 ゆくえなき紫上	443

第二十章 死者なき葬儀——浮舟物語の収束をめぐって	453
一 死骸なき葬儀の類例	454
二 死者なき葬儀がはらむもの	457
三 浮舟失踪以後の状況	460
四 浮舟の再生をめぐって	463
五 浮舟のゆくえ	466

第二十一章 夢のあとの明石中宮——明石一族物語の宇治十帖——

一 明石中宮の位相	475
二 明石中宮の変貌	478
三 明石一族の夢のあと	481
四 明石中宮の宇治十帖	488

初出一覧	499
あとがき	503
索引	001 ⑤

凡 例

- 一、『源氏物語』の本文引用は、小学館刊新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥に拠った。
- 二、『源氏物語』の本文引用に際しては、原則として当該箇所巻名・冊数・頁数を附した。
- 一、『源氏物語』以外の本文引用については、『古事記』『日本書紀』『風土記』『萬葉集』『日本霊異記』『古今和歌集』『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『落窪物語』『堤中納言物語』『枕草子』『和漢朗詠集』『紫式部日記』『栄花物語』『大鏡』『無名草子』『平治物語』『平家物語』『宇治拾遺物語』『十訓抄』『太平記』は小学館刊新編日本古典文学全集、『うつほ物語』はおうふう刊『うつほ物語全 改訂版』、『今昔物語集』『古今著聞集』『増鏡』は岩波書店刊日本古典文学大系、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『袋草紙』『三宝絵』『江談抄』『古事談』は岩波書店刊新日本古典文学大系、『貞信公記』『御堂関白記』『小右記』は岩波書店刊大日本古記録に拠り、歌集の場合は歌番号等、それ以外の場合は冊数・頁数等を附した。他のものについてはそのつと注記した。とくに注記のないものについては、現在通行の本文による。
- 一、引用文の表記等については、私により適宜あらため、必要に応じて、傍線・傍点・記号等を附した。引用文中の「……」は省略を示す。また、割注は「」内に示した。
- 一、敬称は省略することを原則とした。
- 一、注は各章末ごとに掲げた。
- 一、引用論文等については、雑誌掲載後に単行本に収録された論文は単行本に収録のものを、著作集や全集などに収録された場合はそれを優先させるなどしたが、その場合、初出についての情報等は原則として省略した。また、単行本名や論文名の副題の掲出形式や巻号の表記等については統一をはかり、年号については西暦によって示すことを原則とした。

はじめに

本書は、『源氏物語』の表現世界のありようの究明をめざし、『源氏物語』のなかでもとくに光源氏をめぐる物語を対象として、いまここに生き生きと^た顕ち現れてくる物語の動的な様相を論じるものである。

『源氏物語』は、言語、文学、歴史、伝承、習俗、信仰等にかかわるさまざまな要素をとり込みながら、高度な文芸性を醸成している物語文学であるといえるが、それらの要素は緊密に結びつき、相互にせめぎあいながら、独自の物語世界をつくりあげている。それぞれの要素がいかに物語表現のなかに呼び込まれ、その呼び込まれた要素がいかに物語世界を構築していくかを考察することは、この物語の表現世界のありようを明らかにするための有効な手段のひとつであると考ええる。また、『源氏物語』が光源氏をめぐる物語を物語の主軸としていることの意義は重い。光源氏とは何か。光源氏をめぐる物語とはいかなるものなのか。光源氏およびその物語を問うことは、この『源氏物語』という物語文学そのものを問うこととなる。

本書では、かかる観点に立って、二十一編の論考を物語展開や問題意識等に応じて五部に分けて配置し、光源氏をめぐる物語世界がどのように顕現してくるのかを論じていく。

I 「若きいろごのみの蹉跌」では、光源氏の初期の恋物語のひとつである夕顔物語を対象として、若き（いろごのみ）たる光源氏のあり方を問い直す。第一章「そのその夕顔―「夕顔」巻における「心あてに」歌の解釈をめぐって―」では、「夕顔」巻の「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」という歌の解釈をめぐる諸問題を検討したうえで、あらたな解釈を提示し、光源氏と夕顔の物語の独自性を分析する。第二章「門前の隨身―夕顔物語

の始発をめぐって―」では、「夕顔のしるべせし隨身」をとりあげ、隨身の職掌をおさえたうえで、この隨身が光源氏と夕顔とを結びつける役割を負っていることの意義を考察する。第三章「覆面の光源氏―夕顔物語における伝承世界をめぐって―」では、「顔をもほの見せたまはず」に夕顔を訪問する光源氏の姿を始発として、覆面の文化的意義等をおさえながら、光源氏が覆面をつけていたのかどうかを検討し、そこに呼び起こされてくる物語世界について明らかにする。第四章「夕顔物語と「昔物語」」では、夕顔物語における三輪山説話についてあらためて考察しながら、物語が物語を呼び込み、あらたな物語を構築していく様相を考える。

Ⅱ「仮構される聖代」では、栄華への道を歩んでいく光源氏の物語を対象として、とくに儀礼に注目しながら、それらによって構築されていく物語世界について論じる。第五章「池のほとりの光源氏―「少女」巻の放鳥の試みを起点として―」では、「少女」巻における放鳥の試みを取りあげ、史実をふまえながら検討したうえで、それが池において行われていることに注目し、池をめぐる人びとの位相について考察を加える。第六章「野に行く冷泉帝―「行幸」巻の大原行幸をめぐって―」では、「行幸」巻の大原行幸における冷泉帝に着目し、野行幸が王者性を示す儀礼であったことを確認しながら、聖代を仮構しようとしている光源氏の姿について考える。第七章「儀礼の梅枝―「梅枝」巻における朝顔姫君をめぐって―」では、「梅枝」巻の朝顔姫君から送られてきた「散りすきたる梅の枝」を対象として、この枝が光源氏の手によって満開の梅の枝とされることに注目して、光源氏と朝顔姫君は枯れ枝が満開となるふるまいを儀礼的に行い、明石姫君の前途を祝していることを述べる。第八章「御湯殿の儀の明石君―「若菜上」巻における明石の町の生誕儀礼をめぐって―」では、「若菜上」巻の御湯殿の儀において明石君が迎湯役を担当していることに着目して、御湯殿の儀の始原を視野に入れつつ、その場における明石君の役割について考察することによって、女房格のふるまいとされてきた従来の説を問い直す。

Ⅲ「苦悩する巨人」では、第二部世界における光源氏を対象として、光源氏という物語主人公のあり方について論じる。第九章「光源氏の退屈―高崎正秀の源氏物語論をたどりつつ―」では、「若菜上」巻の女三宮が垣間見されることとなる蹴鞠の場が、光源氏が口にする「つれづれ」ということばから導かれていくことに注目し、高崎正秀の源氏物語論を敷衍しながら、この「つれづれ」ということばに込められた意義について論述する。第十章「女三宮のなつかぬ唐猫―柏木物語におけるその位相をめぐって―」では、「若菜上」巻における垣間見場面で登場する唐猫が人に「なつかぬ」とされることを起点として、この唐猫が光源氏から女三宮に与えられたものであった可能性を指摘しつつ、物語世界をひらいていく光源氏という存在について考える。第十一章「光源氏の〈みさを〉―「若菜下」巻における「うたての翁」をめぐって―」では、「若菜下」巻において光源氏が女三宮にむかって口にする「うたての翁」ということばの意義を問い、翁の文化史的意義をふまえたうえで、折口信夫の〈みさを〉という術語を援用しつつ、光源氏という物語主人公が立ち至った物語世界について考察する。第十二章「〈みさを〉について―光源氏論のために―」では、第十一章で検討した〈みさを〉という術語について、用語例を検証しつつ、光源氏という物語主人公をとらえるひとつの視座として定位することを試みる。

Ⅳ「情念のゆくえ」では、女三宮と密通事件を起こし、死んでいくこととなる柏木の物語を対象として論じつつ、そこに浮かびあがってくる光源氏の姿を考えていく。第十三章「〈もののけ〉の幻影―柏木の絶筆をめぐって―」では、「柏木」巻で柏木が最後に書き残した「鳥の跡のやう」な筆跡を対象とし、光源氏の邪視ともいえる視線が柏木を身体から瓦解させていったことを指摘し、「鳥の跡のやう」という表現の意義を検討したうえで、柏木の現世に残した情念のありかたを明らかにする。第十四章「柏木の文袋―封じ込められた最後の手紙をめぐって―」では、「橋姫」巻において薫の手に渡される柏木の文袋に着目して、手紙の供養の考えなどもふまえながら、鎮魂を拒絶する

柏木の情念について考える。第十五章「あはれ、衛門督」考―『源氏物語』における右衛門督をめぐる―」では、「柏木」巻の巻末におかれる「あはれ、衛門督」という言辞によって呼び起こされてくるものを、右衛門督の任官状況等の検討をとおして考察し、政治的に恵まれない柏木像を指摘したうえで、柏木亡きあとの物語世界を論じる。第十六章「紙屋の人」を召す光源氏―「鈴虫」巻における柏木の位相―では、「鈴虫」巻における女三宮の持仏開眼供養の際に光源氏が召した「紙屋の人」に着目して、紙屋院の歴史的要因をたどりながら、光源氏が紙を漉かせる理由、さらにはそこに見えてくる柏木の姿を考える。第十七章「扇をさし隠す夕霧―「夕霧」巻における夕霧の小野再訪をめぐる―」では、柏木の死後、落葉宮のもとに通うようになる夕霧をとりあげ、小野再訪時に「扇をさし隠す」というふるまいを具体的に検証することによって、光源氏の「へいろこのみ」から遠く隔たった夕霧の姿をとらえる。

V「終わりゆく世界」では、光源氏をめぐる物語、およびさらにその先の物語の終末の世界を考える。第十八章「朧月夜の退場―「若菜下」巻における「作物所」をめぐる―」では、朧月夜の出家にあたって物語に呼び出されてくる「作物所の人」に着目して、その考察をとおして朧月夜の退場の意義について考える。第十九章「紫上の二条院―「若菜下」巻における転居の起点として―」では、「若菜下」巻において二条院に転居することになる意義を考察しつつ、死にむかつていく紫上の姿を見つめる。第二十章「死者なき葬儀―浮舟物語の収束をめぐる―」では、「蜻蛉」巻に描かれる浮舟に対する死者なき葬儀を対象として、死者が不在のまま行われる葬儀の意義を考察したうえで、物語が収束していく方について論じる。第二十一章「夢のあとの明石中宮―明石一族物語の宇治十帖―」では、宇治十帖における明石一族を考察対象とし、宇治十帖で複数の東宮候補が現れる現象を分析したうえで、明石入道の遺志は一族を夢の実現へと導いていくとともに一族が滅びていくことも織り込まれたものであり、明石一

族の裔たちを呪縛し続けていくことを指摘する。

若きころごのみとして物語に現れた光源氏が、王者への道を歩み、苦悩する巨人として立ちつくし、やがて物語から姿を消していく。光源氏がひらいていった世界とはいかなるものか。本書では、その踏みあとをたどりつつ、そこに顕現する世界を見つめることとしたい。